

貧困撲滅は人類の願望であり、古来、その手法をめぐって幾多の思想が生起してきた。

1. 共産主義思想

19世紀中葉、ヨーロッパに共産主義思想が、貧困にあえぐ労働者の救済を掲げて、颯爽とデビューした。創始者のマルクスは人間社会を、性悪な資本家階級と性善な労働者階級に2分化し、それを反目・対立させ戦わせた。共産主義思想は、またたくまに虐げられた労働者大衆の心を獲得することに成功した。その力を背景に、レーニンはボリシェヴィキを率いてロシア革命に成功した。また毛沢東は労働紅軍を率いて中国革命を成就させた。共に貧困撲滅を掲げる共産主義思想を錦の御旗として担いだ。ロシアにも中国にも、性善な労働者の天国が出現し貧困が撲滅され、その成果は全世界に輸出されるはずだった。しかし結果として、共産主義思想は世界から貧困を撲滅できなかった。それらの国々は、時の経過と共に、社会が性悪な労働者たちにより牛耳られるところとなり、貧困が蔓延する悪しき資本主義に逆戻りしてしまった。それどころか、共産主義思想は従来の民族対立、宗教対立などの上に、新たに階級対立を加え、さらには人民大衆を強引に2分化し対立させ戦わせ、社会に大きな混乱をもたらすことになった。革命後の中国では毛沢東が、人民大衆を「紅五類」と「黒五類」に2分化し戦わせる文化大革命を起し、多くの人民大衆の生命を奪った。さらにカンボジアではポル・ポトが、国民を旧人民と新人民に2分化し、旧人民に新人民約200万人を撲殺・餓死・病死させた。これが人間を、性悪な資本家階級と性善な労働者階級に、2分化した共産主義思想の無残な帰結である。

2. マイクロ・クレジット

20世紀末、バングラデシュでムハマド・ユヌス氏が、「マイクロ・クレジット」という手法を使い、新たな貧困撲滅行動に立ち上がった。しかしこの実践活動も、貧困撲滅を達成することはできなかった。最近の研究では、マイクロ・クレジットはバングラデシュで5%ほど貧困者を減少させ、貧困撲滅の方向に一定の効果はあったが、貧困者を一掃するということには程遠い状況にあるとされている。ユヌス氏はバングラデシュの貧困女性に少額の資金を貸し付け、小規模事業を起こさせることによって、彼女たちの自立、すなわち貧困からの脱出を手助けしようとした。しかしその手法には限界があったのである。

ユヌス氏は、グラミン銀行を立ち上げ、バングラデシュの貧しく虐げられた女性に、独創的な手法で、少額の資金を貸し付けた。ユヌス氏は、彼女たちに5人のグループを組ませ連帯責任を負わせ、地域ごとに勉強会を頻繁に行い、事業や借金返済のための教育の機会とした。また貸し付けた資金やその利息の回収には、貸し付け開始1か月後から、早々と彼女たちの元に回収人を派遣し、取り立てを行うことにした。これらの経費を賄うため、グラミン銀行の年利はおよそ16%から20%と高く設定されている。それでも返済率は97%と驚異的な水準を保っており、2011年時点で、借り手の女性の数は835万人となっている。この実績が評価され、ユヌス氏は2006年、ノーベル平和賞を受賞することとなり、その手法は世間の多くの識者の高く評価するところとなった。

しかしその手法は、しょせん借金を奨励するものであり、やがては金融資本主義に取り込まれる運命であった。その後、世界に「マイクロ・クレジット」の名称を利用した高利貸し業者が暗躍する結果となり、今年に入ってインドでは過剰貸し付けが問題化し、政府が規制に乗り出したのも、その必然的な結果である。

国家も会社も家庭も、無借金が原則である。たとえ「マイクロ・クレジット」という美名の下でも、借金を奨励する思想を肯定することは誤りである。ユヌス氏は、貧しく虐げられた女性に少額資金を貸し出した。そこには性善な人間への多大な期待があっただろうが、すべからず人間は2重人格であり、多くの人間は性悪な面も持ち合わせており、いったん借金をしてしまったら返済を渋るのが常である。日本にも、「借りるときの恵比寿顔、返すときの閻魔顔」という俚諺があるほどである。したがってユヌス氏も、それを防ぐために幾多の手法を用い、結果として年利を高く設定せざるを得なかったのである。そのためグラミン銀行をはじめとするバングラデシュの「マイクロ・クレジット」組織は、バングラデシュから貧困撲滅を達成できなかった。バングラデシュはいまだに世界最貧国の一つである。

3. ソーシャル・ビジネス

21世紀に入り、ユヌス氏は「マイクロ・クレジット」での貧困撲滅をあきらめ、「ソーシャル・ビジネス」という新たな思想を繰り出し、貧困の撲滅に再挑戦している。このユヌス氏の実践的発想に、私は驚くと同時に最大限の敬意を払うものである。しかし残念ながら、その「ソーシャル・ビジネス」もまた、「マイクロ・クレジット」同様に、大きな思想的な欠陥を持っている。ユヌス氏の提唱する「ソーシャル・ビジネス」は、現在、日本を含む世界各国で、大きくもてはやされている。多くの識者が、その思想的な欠陥について理論的に追求することなく、ユヌス氏の名声に便乗し、「ソーシャル・ビジネス」を褒

めそやしているのには、驚くばかりである。

ユヌス氏の提唱する「ソーシャル・ビジネス」の眼目は、「投資家は、投資額のみを回収できる。投資の元本を超える配当は行わない」という点にある。つまり「ソーシャル・ビジネス」に投資する資本家は、その投資に対する配当を受け取ることができないということである。これは資本家に金儲けをあきらめさせるということであり、資本家としての地位を自主的に放棄させようとするものである。「マイクロ・クレジット」で性善なる一般大衆に望みをかけ、性悪な一般大衆の壁に跳ね返されたユヌス氏は、今度は性善なる資本家に多大な期待をかけることにしたのである。このユヌス氏の大胆な提唱を額面通りに実践すれば、それは資本家の止揚・消滅に行き着くことになる。

ユヌス氏は若いころ、マルクス経済学を学んだといわれており、それは「マイクロ・クレジット」や「ソーシャル・ビジネス」の発想に、大きな影響を与えている。その反面、ユヌス氏はマルクスの資本家と労働者を2分化する思想から逃れられないでいる。マルクスは人間を資本家階級と労働者階級に2分化したが、これは大きな誤りであった。そもそも人間は2分化できないし、また2分化してはならない。人間を2分化して戦わせれば、ポル・ポトの悲劇に行き着くことは歴史が証明済みである。しかしながらユヌス氏も含めて、現代社会はこの誤ったマルクスの共産主義思想から脱皮できないでいる。

ユヌス氏の「ソーシャル・ビジネス」が完全実施され、それが社会の主役になった場合、社会には純粋な資本家は存在しないことになる。配当を受け取らない投資家という存在は、資本家と呼ぶことはできないし、それらの投資家たちの資本はやがて枯渇し、彼らが資本主義社会では存続できなくなるのは必定である。そして資本主義社会から資本家のみが止揚されれば、社会は労働者天国となり、共産主義に逆戻りしてしまうことになる。かくして資本家と労働者を2分化したまま、資本家のみを止揚しようとする「ソーシャル・ビジネス」という思想は、珍妙な結論を迎えることになるのである。

現代では資本家と労働者は、相互転化が可能であり、今や労働者の失う物は鉄鎖のみではなく、彼らの前には脱サラして資本家になる道も大きく開けている。また資本家も経営に失敗すれば、たちまち労働者階級に仲間入りすることになる。現代社会において、もっとも必要なことは資本家階級と労働者階級を2分化した共産主義思想を超克することである。現実の社会においては、人間が存在しているのみであり、資本家階級と労働者階級の存在の想定は虚構である。現代社会はマルクスの亡霊と絶縁しなければならない。ユヌス氏は「ソーシャル・ビジネス」で、大胆に資本家の止揚を提唱した。今や、それをさらに思想的に発展させ、資本家と労働者をともに止揚する思想を誕生させねばならないのである。そして貧困撲滅を達成せねばならない。

4. 社会実験

学問は机上の空論であってはならない。自然科学はその理論が実験で試される。社会科学も、その理論は社会実験で試されなければならない。共産主義思想と革命という社会実験は人間に悲劇をもたらしたが、それでも試行はなされなければならない。その点で、ユヌス氏の相次ぐ社会実験は、きわめて高く評価されるべきである。

現在、私はバングラデシュとミャンマーで、私財を投じて、「ソーシャル・ビジネスの発展型」を追求・試行している。それは資本家階級と労働者階級の止揚・再統合であり、共産主義思想の超克を目指す新思想・新理論の社会実験である。性善な資本家と性善な労働者に依拠し、性悪な資本家と性悪な労働者を駆逐する社会実験であり、2重人格の人間を統御するシステムの試行である。もちろん宗教対立・民族対立・男女対立も止揚することを志向し、同時に貧困撲滅を達成しようとする社会実験でもある。しかしながら、このように私が大言壮語してみても、資本主義社会は非情であり、わが企業があえなく倒産し、私のプロジェクトも空理空論に終わる可能性が大である。そしてなによりも、結論を待たずして私自身の余命が尽きるかもしれない。なお今のところ、この馬鹿げたプロジェクトの思想的後継者はいない。

以上